
魔法少女リリカルなのは ～逆光剣を継ぎし者～

ノコノコノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 逆光剣を継ぎし者

【Nコード】

N4901Z

【作者名】

ノコノコノコ

【あらすじ】

初投稿です。リリカルなのはの世界に衛宮士郎や遠坂凜以外の魔術師が介入したらどうなるかという考え（妄想）から書いてみました。一応stts編までの基本的な構想は考えていますので完結目指して頑張ります。

プロローグ

フラガの一族。それは遡れば遙か昔、神代の時代まで至るアイルランドの古き魔術師の家系。元は神々に仕えていたルーンの大家である。

フラガの一族は「伝承保菌者」と呼ばれる魔術回路とは違う魔術特性を代々受け継ぎ、現代にて宝具を、神代の魔剣「フラガラック」をカタチにすることが可能であった。

フラガの一族はその秘儀を絶える事無く子孫に伝える為、アイルランドにて細々と代を重ねていた。だがある時、当時の女性当主が故郷であるアイルランドを出て魔術協会に所属し、武道派の魔術師として活動し始めた。

やがて女性当主は執行者に任命され任務による激戦を生き抜き、遂には歴代最強の執行者と呼ばれるまでその技量を高めた。そしてそれは、後のフラガの一族の在り方を変える要因となった。

その女性当主以降、フラガの跡継ぎは次期当主として認められる為に現当主と戦い、己の武を示すのが決まりとなった。

これによりフラガの当主が武に秀でることはごく自然な事となり、そしてこの私レオン・フラガ・マクレミッツもフラガ一族の当主となり、二十代で最強の執行者と呼ばれる存在となった。

だが私は知らなかった。権威主義の温床である時計塔にて強い権威を持ち、有能であるフラガの存在を疎ましく思い、同時に執行者である自分に対して強い恐怖心を持つ者が多く存在していることに。

ドイツのとある森の中から戦闘音が響き渡る。そこでは火が木々を焼き、氷柱が地面より生え、雷が蛇のように散り、風が不可視の刃と化し、無数の剣が所々に突き刺さっていた。

それは正しく理より外れた魔術師同士の戦い。それも戦闘に特化した執行者同士の戦いだった。執行者であるレオンも当然のようにこの場に居た。

だが執行者達のターゲットはレオンだった。レオン以外の執行者達全員が暴走した一部の上層部からのレオン抹殺という命令を受けており、つまりこの場はレオンの処刑場だった。

執行者達はレオンに対し、自身の切り札を封印した上で数による包囲陣を展開していた。これはフラガ家の所有する宝具を完全に封じる為の対策、数による単純な暴力だった。さらに圧倒的に有利である筈の執行者達の顔には微塵の油断さえ無い。

作戦により、戦いは一方的な死刑となる……筈だったが、レオンも伊達や酔狂で最強の執行者と呼ばれる存在ではなかった。

レオンは圧倒的不利な状況下でありながらも一歩も引かず、ルーンの加護によって破城鎚と化した腕を鞭のように振り回し、またライフル弾と同等の貫通力を持つ蹴りを放ち、互角以上に渡り合っていた。

当初、レオンはその突然の襲撃に混乱した。今でも何故狙われているのか解っていない。

『何故?』『どうして?』

当然のように疑問が頭に浮かぶ。だが、瞬時にそのような考察など頭の済みに追いやった。敵であるなら殲滅する。戦う理由はそれだけで十分である。例えば戦う相手が顔見知りでも、自身の生命を危ぶませるなら容赦はしない。

「シッ!!フッ!!……………砕く!!」

一人、又一人とレオンは敵にトドメを刺していく。代償に自身の血肉を差し出して。

無駄な恫喝など一切無く、ただ剣戟にも似た音律を以て終わり無^{エンドレスワルツ}き戦舞曲を踊り狂う。

「ハアッ!!ハアッ!!……………ンクッ、ハアッ!!……………」

樹に背中を預け、荒い呼吸を繰り返す。辺りに立っている……………否、生きている人間は自分一人だけとなった。

だが、自分も当然無事ではない。着ていたスーツは見る影もなくボロボロになり、全身から止めどなく血を流していた。傷に関しては治癒の魔術を使えば治るが、肝心の魔力が尽きかけている絶望的な状況。

「……………死ねない。私は……………まだ死ねない……………」

だが、そのような状況下でも諦めず、足を引きずりながら森の出口を目指し始めた。

どれ程歩いたのだろうか？息は切れ、足は鉛のように重い。血を大量に失い意識が朦朧とする。今この状態は魔術刻印が生かし続けている為、何とか生き繋いでいる状況であった。限界など、とうの昔に超えている。

「あつ……」

木の根っ子に足を取られその場に倒れる。担いでいたアジャスタケースがコロコロと転がる音が耳に強く響く。

「クッ………うう……」

体を起こそうとするが起き上がれない。今まで騙し騙し使っていた体がここに来て一斉に悲鳴をあげる。同時に魔力が完全に枯渴したようで、魔術刻印による延命機能が停止した。

今まで多くの死を見て、同時に与えてきた。その経験からもう助からないのだと理解した。

ゆっくりと仰向けに転がり空を見た。木々の間から覗く空には一面の星空と月が浮かんでいた。

「……………」

不思議と涙や怨嗟の声は出なかった。仕事柄、何時かはこうなる

と覚悟はしていた。だが早すぎる。

「ああ……寒い……眠い……これが……死……」

心残りはある。唯一と言っているいい心残り。それはフラガの一族が自分の代で途絶えること。ではなく、もっと別のこと。

（生涯……一度もいい女に……出会えなかったな……）

そんな事を思いながら意識を手放し、視界は闇に染まった。

「たまには散歩も良いものじゃな。こんな場所で死にかけのフラガの伝承保菌者に出会うのだからのう」

いつの間にかレオンの近くに老人が立っていた。老人はアジャスタケースを手に持ち、レオンの顔をジロジロと覗いた。

「ふむっ………確かお前にはルビーの件で一つ貸しがあったな」

そう言うつと老人は懐から宝石を取り出し、意識の無いレオンに無理矢理吞ませた。するとレオンの体に魔力が戻り、再び魔術刻印が働き始めた。

その様子を見た老人は良しと頷いた。

「さて………」

老人は顎に手を添えて考えた。このまま放って置けば、いずれま

た同じ事が繰り返り起こる。それでは意味がない。

「……………フツ」

老人は何か良からぬ事を思い付いたのか、口元に笑みを浮かべると懐から宝石で出来た剣を取り出した。途端に剣から膨大で緻密な魔力と神秘が放たれる。

「フラガの小僧よ。今から貴様を平行世界へと飛ばす。その地で少しばかり常識を学ぶのだな」

斬っ！！

言葉と同時に老人が放ったとは思えない程の鋭い斬撃が放たれ、空間が切り裂かれた。レオンの体はその裂け目に呑み込まれ、さらに老人がアジャスタケースを投げ込んだ。その二つを呑み込むと、やがて裂け目は何事も無かったかのように閉じた。

「もつとも、その世界では数年後に二度も世界の危機が訪れるから頑張つて生き残るんじゃぞ」

不吉すぎる言葉を残して老人は笑いながら消えた。後には夜の静粛のみが残った。

老人の名前はキシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。現存する魔法使いの一人であり、第二魔法の使い手である。さらにここ数年、時計塔内でのアンケート「迷惑な人」部門に於いてぶつちぎりの1位を取り続けている気まぐれで傍迷惑な老人であった。

(……生き……てる……?)

レオンは森の中で目を覚ました。その直後激しい嘔吐感に襲われた。

「グッ……ゲッ………ガハッ!!………グホッ!!………ゲボッ!!」

どこにそんな体力が残っていたのかと思うほどの勢いで口から凝固しかけの血の塊を吐き出す。

全てを吐き出したところで自身の身体の異常に気付いた。

「ハア……ハア……ハア……身体が……縮んでる……だと?」

ピッタリだった筈の服は今はだばだばで、実際に服から手を出すと子供サイズの小さな手が出てきた。喋る声も高くなっているのが本当に肉体が退行したのだろう。

(……魔力が戻ってる?)

さらにここで枯渇していた筈の魔力が全快近くまで回復し、魔術刻印が動いている事に気付いた。

「……だが先ずは……」

異常について考えるより先に、レオンは怠慢な動きで治癒と賦活のルーンを身体に刻む。無事に魔術が発動すると、治癒の抱擁に身を委ね仰向けになる。

（ここは……何処だ？）

視線だけを動かし周りを見る。近くにアジャスタケースが転がり、先程と同じ森ではあるが樹の配置が違い、体を感じる気温が違っていた。それによりここがドイツではない事が解った。

（……眠い……寝よ）

まだまだ多くの疑問が在るが、急に睡魔が襲ってきた。体を満足に動かすことの出来ないレオンは抵抗せず、眼を閉じそのまま寝た。

深夜、森の中。川辺の近くで血の付いただぼだぼなYシャツを着て焚き火の前で体育座りをしているレオンの姿があった。

目が覚めたら見知らぬ場所におり、それだけでなく肉体が退行するという謎の現象に負のオーラを全開している。

「血が………血が足りねえ！！！！」

……訳がなかった。

魑魅魍魎の巣窟である時計塔で活動していたレオンからすればこの様な怪奇など日常茶飯事であった為、動揺は少ない。

事態をある程度把握した後はすんなりとこれらを受け入れた。確かに疑問はあるがあのも最悪の状態から脱出できたのだ。何であれ逆に感謝している。

レオンがちょうど良い感じに焼けた肉にかぶり付いた。先程の言葉通り、足りない血を補充するかのように貪り食う。因みに肉の正体は野ウサギである。

食べ終わると早速状況の再確認を行った。

「傷は……………完治まで二ヶ月……………と言ったところか」

治癒魔術を全開で展開すればもっと早く完治するのだが、回復障害の術式が働いており、術の効きが悪い。

「悪趣味な……………」

攻撃の中に呪詛の類いが混じっていたのだろう。恐らく逃げられた場合でも追跡を容易にする為に。その用意周到さに感心すら憶える。一先ずこの術式を解呪しなければ魔術による満足な治療は出来ない。

だが術式は今すぐ解呪出来るようなちやちなモノではなく、不本意ながら後回しにする事にした。

「しかし、ここは本当に何処だ？言葉が通じれば良いが……………」

レオンはヨーロッパ圏内だと予想しているが、もしかしたら違ってもかもしれない。まあその時はその時だ。

「所持品は……………アジャスタケースにルーン石の耳飾りに貴金属が数点。隠し金はユーロ紙幣とドル紙幣が複数枚。アジャスタケースにはフラガラックが三発……………」

フムフムと頷きながら所持品の点検を行う。お金に関しては使えない可能性もあるが、幸いこの森には豊富な食料があるので飢え死にすることは無い。

「手袋は……ダメか。ボロボロな上、術式が崩壊している。まあ、あれだけの攻撃を受けたなら仕方ないか。靴に仕込んでいるルーン石は……粉々。むううつつ……」

武装に関しては早急に揃えなければ、追っ手が何時来るかわからない今の状況では危険すぎる。

「兎に角、まずは情報を集めなければ……。明日から忙しくなるな」

そう言いつとレオンはそのまま寝た。

翌日、レオンは日が昇る前に森を抜け町に出た。町にはまだ人影が無いが、念のためレオンは魔術を使い自身の姿を消していた。

「は？……何と!？」

そしてレオンは町を見て、町の案内板の地図を見て驚きの声をあげた。

地図には日本語が書かれており、この場所が日本であり、町の名前は海鳴市であることが判った。だが、その事実がレオンの混乱を激しく招いた。

「何故極東の島国に！？い、いや、魔術協会から隠れるという意味では最高の環境だ。だが、どうして？ほぼ地球の反対側だぞ。空間転移？馬鹿な！それこそあり得ん！」

協会でトップクラスの実力を持つ魔術師ならば可能かもしれないが、それを自分に行う理由が皆無である。

レオンは考えを一時保留して服一式の購入を急いだ。幸い、日本語は解るし話せるので問題はない。

レオンは開店する前の店の主人に暗示を掛けて無事に服一式を購入した。支払いはユーロだったが多く支払ったので問題はないだろう。

その後銀行にて紙幣を全て日本円に換え、情報が得られる場所を探した。

たどり着いた場所は図書館。そこにある新聞を片っ端から読み漁り、同時にPCを扱い情報をかき集めた。そして遂に一つの結論に至った。

（平行世界……だと……）

この世界はレオンの知る情報との食い違いがかなり有り、その結果から導き出された答えがそれだった。そして同時に、このような事が出来る人物にも心当たりがあった。

「私を飛ばしたのはゼルレッチ卿ですね。成る程、体がこうなっ

たのは世界の修正力が原因でしたか……」

平行世界を渡った事を考えたら、肉体の退行程度で済んで運が良かったかもしれない。いや、実際に運が良かったのだろう。

「だが何故わざわざ極東の島国に……まさか!？」

ゼルレッチ卿の超迷惑な気まぐれは時計塔でもかなり有名だった。それに加え、ゼルレッチの気まぐれに関わった者は常人では耐えられない精神的苦痛により悉く廃人となるとの噂が広がっていた。

因みに精神的苦痛云々は某魔術礼装が原因である。

「……………」

レオンの脳裏に嫌な考えが浮かぶ。まさかこの状況もゼルレッチ卿の気まぐれの一種か、と。

「ま、いくら考えても答えは出ませんが」

レオンは前向きに考える事にした。自身の精神の安定の為に。幸い、魔術が扱えるのでこの世界には魔術基盤が存在することは確定である。ならば焦らずゆっくりと身体の成長を待てばいい。

そう結論付けてレオンは図書館を後にした。

外はいつの間にか夕方になっており、レオンは段ボールを帰り道で拾い森へと帰っていった。

プロローグ2

翌日、レオンは目を覚ますと比較的町に近い場所にある広場で改めて子供サイズとなった身体の感覚を確かめていた。

「…………痛っ!？」

やはり体が痛むのか、レオンは顔を歪めた。レオンは体の確認を止め、その場に座り呪詛の解呪を試みようとした。

(なっ!?)

その時、時計塔に在籍していた時でも感じたことの無いほど膨大で、馬鹿げた量の魔力を感知した。

レオンは反射的に近くの木に登り、魔術で身を隠し気配を消した。それだけでも身体に負担が掛かったがそれどころではない。

レオンは今この時までの自身の楽観的な考えを罵倒した。

(迂闊だった。極東の地にコレほどの者が存在しているとは)

だが同時にチャンスだと思った。もしこの魔力を持つ相手がこちら側の人間ならこの世界の魔術関係の情報を得られる。

レオンが緊張した面持ちで待つ中、それは現れた。

「ヒッグ…………お父さん…………お母さん…………えぐっ…………お兄ちゃん…………お姉ちゃん…………」

栗色の髪をツインテールにした今の自分と同じ……いや、恐らく年下の、魔力以外はどこにでも居そうな普通の女の子が泣きながらレオンの隠れている木の真下まで来た。

「……………」

レオンは少女を注意深く観察した。そして経験からその子がこちら側の人間ではないと判断した。両親が魔術師である可能性は有るが、この膨大な魔力を垂れ流し状態にしている事からその可能性は低い。

（面白い）

レオンの中で少女に対する興味が俄然湧いた。レオンはリスクを省みず少女に話し掛ける事にした。

「どうしたのですか、お嬢さん？」

「だ、誰！？」

女の子は不意打ちで話しかけられたことに驚き、泣き止んだ。そして声のした方向を必死に探す、当然魔術で身を隠したレオンを見付けることは出来なかった。

「妖精さん？」

女の子は首を傾げてそう言った。その言葉を聞いたレオンは内心で苦笑した。

「違います。私は……」

レオンは少しだけ考えてから口を開いた。

「魔法使いです」

「魔法……使い？」

「ええ。姿が見えないでしょ？実は魔法で隠れてて、私は貴女のすぐ側にいます」

「ええ　　！！」

女の子は驚いて見当違いの方向を手探りで探すが、当然手応えはない。

「本当に……魔法使い……なの？」

「ええ。本当です。ところで嬢さんはどうして泣いていたのですか？」

レオンは内心お節介だと思いながら聞いた。すると女の子は途端に慌てた。

「な、なのはは泣いてないもん」

「（……なのは？）いいえ、なのはは泣いてました。もしかして迷子ですか？」

「ま、迷子じゃないもん。なのはいい子だから迷子になって泣いて迷惑なんてかけないもん」

「そうですか」

レオンはウンウンと頷いた。その顔は全て理解した、と語っていた。

「なら一緒に親を探してあげましょう。大丈夫です、私がすぐに見つけてあげますから」

「違うもん！本当になのはは迷子じゃないもん！」

力一杯否定し、違うと言い続けるなのはを見て、レオンは漸く本当に違う事が分かった。

（ん？）

と、ここでレオンはなのはの手から少量の血が出ていることに気付いた。

「手、怪我をしていますね」

「え？……あ！」

気付いたなのはは慌てて血を舐め取った。だが血は止まる気配が無く、それを見たのはが泣きそうになった。

その様子を見ていたレオンは簡単な治癒魔術を使いなのはの怪我

を治した。それは魔術の秘匿を厳守する筈の魔術師としてはあり得ない行動である。

そしてなのは手の傷が治癒される様子を目を白黒させて見ていた。

「えっ……………？魔法？本当に？」

「サービスです。二度目はありませんよ」

レオンの言葉を聞いてないのか、なのは何かを考える素振りをした後、突然改まり、祈るかのように言葉を紡いだ。

「魔法使いさん！お願いです！お父さんを助けて下さい！！」

なのはは見えない魔法使いに向かって事情を全て話した。

たどたどしい説明だったが、レオンが分かった事は、なのはの父親が大ケガを負い、今も目覚める気配がないまま入院しているという事だった。

（成る程。だから泣いていたのですね）

なのはの涙の理由が判り、一人で納得しているとなのはが再び口を開いた。

「お母さんは何も言わないけど悲しそうな顔をしているし、お姉ちゃんはいつも疲れた顔をしているし、お兄ちゃんはある日から怖

くなつたし……」

「事情は分かりました。どうやら大変な状態のようですね」

話している内になのはが再び泣きそうな顔になり始めたので、レオンはなのはの言葉を遮った。

「うん……。だから、魔法使いさん！助けて下さい！」

なのはの言葉にレオンは暫く考えた。

「……先に二つだけ言わせてください。一つは私の使う魔法……いえ、魔術は万能ではありません。ですから貴女のお父さんを必ずしも治せるという保証はありません。そして二つ目に、魔法使いにお願いする場合は原則として等価交換です」

「とうかこうかん？」

「分かりやすく言えば、お願いに釣り合うだけのご褒美を用意できるかということです」

契約内容を聞いたなのはは途端に暗い表情になり、必死に自分の身体を探った。そしてポケットの中に何かがあったのか、それを取り出すとオズオズと掌を開けた。そこには一粒の飴玉があった。

「今は……今はこれだけしかないの。でも、あとで必ずもつとものつといいものを用意するの。だから……」

「いえ、それだけで十分です」

レオンは不釣り合いな報酬で依頼（お願い）を引き受けた。

誤解無いように述べるが、レオンは底抜けの善人でも、ましてや魔術の秘匿に疎い訳でもない。

先程の治癒の件もそうだがこれらは純粹な善意ではなく、なのは持つ膨大な魔力を感じて将来この事が大きく返ってくるという打算がレオンの中で在ったからだ。

因みに等価交換の件は最低限の線引きであり、魔術の秘匿はいざとなれば忘却のルーンでどうにでも出来ると考えていた。

レオンは木から音もなく飛び降り、隠蔽の魔術を解いた。それによりレオンの姿が普通に見えるようになったが、なのはからすれば急に目の前に人が現れたような物だ。

「にや !!!?」

だからなのはが大声で叫んだのも無理はない。

「落ち着きましたか？」

「うん……」

なのははそう言ってレオンをじろじろと見た。

「なんか魔法使いつばくないの……」

その言葉にレオンは薄く笑みを浮かべた。

「魔法使いがいつも魔法使いの格好をする訳がないじゃないですか」

その言葉になのはは妙に納得した。テレビアニメの魔法少女も、正義の味方も特別な時にしか変身しないから目の前の少年もそうなのかもしれない、と思った。

「じゃあ、なのはのお父さんが入院している病院まで案内して下さい」

「分かったの。……えっと……」

なのはがこちらを見て何か言いたそうな顔をした。その時になって漸くレオンは自身の名を告げてないことに気がついた。

「私の名前はレオン・フラガ・マクレミッツです。呼びやすい方で呼んで下さい」

「分かったの。わたしの名前はなのは。高町なのはなの。よろしくね、魔法使いのレオン君」

それがレオン・フラガ・マクレミッツと高町なのはの初めての出会いだった。

病院のとある個室の病室。そこには呼吸器を着け、多くの管に繋がれたまま眠っている男性、高町士郎が居た。

レオンは早速士郎の身体に触れ、魔力を通して中を診た。結果、身体の損傷が酷く、治るかどうかは五分以下の状態だった。

（随分酷いですね）

そう思いながらレオンは病室の扉を閉め、人払いの結界を張り、カーテンを閉めた。

「お父さん、治る？」

「できる限りの事はします」

そう言いながら、レオンは魔術回路に魔力を通し、魔術刻印を起動した。

（変わった……？）

レオンの変身を期待していたのははレオンの雰囲気が変わったことを敏感に感じ取った。

レオンは洗練された動きで指を振るい、次々とルーンを描く。なのはから見れば、それはまるで指揮者が指揮棒を振るうかのような動きだった。

「サイン、エワズ、ウルス、フィフス……」

レオンは自身に訴える呪文を口にする。そして刻まれたルーンが一斉に光を放ち、士郎が緑色の優しい光に包まれた。

（魔法だ！）

なのは今の状況を忘れ、感動に目を輝かせた。

（ん？）

レオンはこの時になって初めて自身が使役する魔術の力が上がっていることに気が付いた。

（何故？……そうか！）

レオンはすぐにその原因に思い至った。

魔術は扱う者が少なければ少ない程強大になる。極端に言えば魔術基盤を独占すれば、自身の扱う魔術は魔法に近い力を持つことになる。

レオンの扱う魔術の急なパワーアップはこの世界で魔術を扱う者が自分の世界よりも少ないことを意味していた。

（これならイケる）

この現象は今のレオンにとって非常に有り難い物だった。厳しいと思っていた治療も今の力なら十分に可能である。そう思い、レオンはさらに賦活のルーンを重ねていった。

そして一時間後、漸く士郎に変化が訪れた。

「（ん…………んん）」

呼吸器越しからくぐもった声が聞こえた。それを聞いたレオンは魔術を解いた。そしてなのはと共に見守ると、やがて士郎は目を開けた。

「（こっは……………？）」

士郎の視線は臆気だったが呼吸器を外すとベッドから上半身を起こした。そしてなのは達に視線を向ける。

「なの……………は？」

「お父さん！！良かった……………本当に良かった！！」

なのはは士郎に飛び付いた。顔は見えないが、嗚咽混じりの声から泣いているのが分かる。

状況がいまいち呑み込めていない士郎は戸惑った。だがなのはに寂しい想いをさせた事だけは分かったのでその髪を優しく撫でた。

レオンはその様子を見ると踵を返した。

「契約は完了しました。これにて私は失礼します」

そう言って病室から去ろうとするレオンに、士郎は慌てて声をかけた。

「ちょっと待ってくれ！君は一体？」

「……ただの一般人です」

「あのね！あの人はレオン君って言ってね！レオン君は魔法使いなの！」

「は？」

なのはの言葉を聞いて、士郎の頭に疑問符が浮かぶ。結局レオンは士郎の質問に曖昧にしか答えず病室を後にした。

「士郎さん！？」

途中、女性が驚く声と花束が落ちる音がしたが、レオンは特に気にしなかった。

昼からは本格的な解呪を行い、治癒魔術を刻んだ。それ以降は特に変わったこともなく一日が終わった。翌日、レオンにとって大きな機転が訪れた。

「まさか……」

昨日来たなのはが再び現れた。

「廃ビルにソファーがあるとは！」

……等というイベントではなく、むしろ昨日の事は全く関係ない。

その日、レオンは朝の治癒を終えると森の探索に出た。そして暫く探索を続けると森の外に廃ビルを見つけた。

「これで雨風が防げるな」

当初の目的は雨風を防げる場所を探す事で、最悪洞穴でも良いと思っていたのでこの存在は大変有り難かった。

三階建ての廃ビルは当然のようにコンクリートが剥き出しであったが、所々の部屋にはドアが付いていた。そして廃ビルの三階にある部屋のドアを開けた時、レオンはそれ（ソファ）を見つけた。

そして最初に戻る。

レオンはソファに寝そべった。壊れている感じはなく、綿も大丈夫だ。

「完璧だ！」

レオンの見つけたソファはお世辞にも綺麗とは言えない。むしろボロボロで粗大ゴミ一歩手前だ。しかしレオンのテンションは上がっており、ガッツポーズまでしている。

念の為、フラガー族の名誉の為に記載するが、元の世界でのフラガー族は貧乏ではない。むしろ先祖が残した遺産はかなりの額であり、代々の当主が時計塔での「仕事」で稼いだ金も相当な額になる。

レオン自身も「仕事」でそれなりの額を稼いでいたが、本人は最低限の生命維持さえ出来れば問題ないと考えており、私生活はかなり残念な物だった。

某女性当主も同じようなタイプのダメな人であったが、遺伝だろうか？

閑話休題（それは兎も角）

レオンは当然その廃ビルを拠点と決めた。

不法侵入に不法入居？

魔術師に世の理を説く方が間違っている。

そして拠点と決めたからにはそれなりの備えをするのが魔術師だ。

レオンは早速敷地内に探知系の結界を、ソファアが在った部屋に人払いの結界を張った。流石に永住するつもりは無いため簡単な備えだが、余裕があれば簡単な工房もどきを作るつもりではある。

その日は祝いとばかりに川魚を数匹捕え、ささやかな夕食を終えた。

廃ビル発見から一週間が経過した。その間レオンは治療の合間に町の探索を行っていた。

結果、探索した範囲内では魔力を持つ存在がなのは以外に居ない事が判り、霊脈に関しても手付かずのまま放置されている事が判った。

これにより自分以外の魔術師がこの町に居ない事をレオンは確信した。

その日、朝から食料の調達と治癒を行うと昼過ぎに広場で軽い運動を行った。その時、再びあの馬鹿デカイ魔力を感じた。間違いないのはだろう。だが今回はそれに加えてもう一人、気配があった。

レオンはまたも木に登り、気配を消して魔術で姿を隠した。何故なら、その気配から今の自分では勝てない程の力を感じたからだ。

「……………」

息を潜め、気配を殺す。やがて姿を現したのはなのはとあの時の男性、高町士郎だった。

「なのは。本当にここにいいのかい？」

「分からない。でも、なのははここでレオン君と会ったの」

「そうか。だったらこの近くに住んでいるかもしれないね」

どうやら二人はレオンを探しているようだ。

（何故？）

レオンは首を捻った。前回の治療は等価交換（原則的には違うが）による対等な取り引きである。礼を言われる理由がない。

と、やはり一般人とは違う考えを持つレオンであった。単純にお礼を言われることなど欠片ほども考えていない。

「見つかるかな？」

「見つけたいね」

二人は周りを見回し、士郎はそこからさらに気配を感じ取ろうと
していた。

その様子を見たレオンは遠くに石を投げ、極小さな音を立てた。
一般人なら気づかない音だが、レオンの目論見通り士郎はその音に
気付いた。

「なのは。ここで待つてなさい。お父さん、すぐに戻るから」

そう言つて士郎は森の中に消えていった。それを見届けたレオン
はなのはの背後に降り立った。

「誰を探しているのですか？」

「えっと、レオンっていうのはと同じくらいの男の子」

「見つかりましたか？」

「ううん、見つからなくて困つて……………にゃああああ
！！！？」

前回よりも大きい叫び声が森に響き渡った。

「見知った筈の顔を見て叫び声をあげるなんて、なのはは失礼で
すね」

「ご、ごめんなさい……じゃなくて！隠れて脅かすレオン君が悪いんだよ！」

怒りながら言うなのはの表情は明るく、前回の暗さは欠片ほども残っていなかった。

「なのは

！！どうした

！？」

と、ここで物凄い勢いで士郎が戻ってきた。それはもう、今のレオンがドン引きする程の必死さで。

「じゃ、なのは。私はこれにて退散します」

シュタツ、と手を挙げたレオンはなのはが何かを言う前にその場から逃げようとした。だが。

ガシッ！！

「なにっ！？」

十数メートル離れていた筈の士郎が一瞬で距離を潰し、レオンの両脇に手を入れてそのままレオンの身体を持ち上げた。

「ははは、レオン君、どうして逃げるのかな？君には話したいことがたくさんあるのに。そう言えば、こうして話すのはあの時以来だね。あの時は何が起きているのかさっぱりだったし、君のことも知らなかったから仕方がなかったけど、あの後なのはから聞いたよ。君は魔法使いで俺を治してくれたんだって？」

レオンを捕まえた士郎は一息に捲し立てた。その様子からレオンを逃がすつもりがないことが伺える。

「無拍子！？……いや、瞬歩か！？」

レオンは士郎の質問に答えず地面を見た。士郎の足元には高速で走り抜けたような跡があった。

「今日はお礼に君を家に招待しようと思っただよ。桃子の手料理は旨いぞ」

「くっ、甘く見ていた。まさか代行者クラスの實力……………一般人がこれ程の技を修得しているとは」

「だけど急に君を家に連れていったら家族の方が心配するだろう？だから家に連絡してくれると嬉しいんだけど？」

「はっ！？まさか日本の退魔師！？それならば色々つつじつまが合っが……………」

どこまでも噛み合わない会話はなのはが止めるまで続いた。

『レオン君、高町家へようこそ』

「はい……………」

結局レオンは高町家で夕食をご馳走になる事となった。

森での会話を端的に語るなら、

「士郎さんを治療した報酬はなのはから貰いましたからお礼の必要はありません」

「レオン君が良くてもこっちはまだまだ君に感謝しきれないんだよ」

「……どうして私が治したと微塵も疑わずに信じれるのですか？私が名医に見えますか？」

「君は魔法使いなんだろう？なのはから聞いたよ」

「……子供の言うことを信じるのですか？」

「家族だから信じたいんだよ。それに医師達も言ってたよ。俺の回復は奇跡だって。魔法云々は兎も角、その奇跡を起こしたのがレオン君ならやっぱりお礼をするべきだよ」

「ですから私は不要だと……」

「ははは、子供が遠慮することはないよ」

そしてレオンは高町家へと強制連行された。拐われたとも言っ

互いに簡単な自己紹介を終わらすとキッチンルームへと案内された。食卓には所狭しと料理が並べられており、それだけで高町家が精一杯レオンを歓迎してくれていることが分かる。

食事が始まると、レオンは毒物の有無を素早く確認し、その後は

貴重なタンパク質を中心に料理を食べていった。

「どう、レオン君。おいしい？」

暫くして桃子がレオンに感想を聞いた。

「ええ。大変食べやすく、栄養のバランスも良いです」

「それは良かったわ」

微妙に返答がおかしかったような気がしたが、桃子は大人の余裕でスルーした。

「ところで、レオン君。レオン君の両親は？」

その質問にレオンは暫し考え、そしてなのはをチラリと見た。なのはは嬉しそうに食事をしている。

「……食事中に話す内容ではありません」

「そう……」

その一言でレオンの事情をおぼろ気ながら感じた桃子はそれ以上の質問はしなかった。

「もしレオン君が良ければ、両親の事とかを話してくれないかな？」

食事が終わるとなのはを除いた全員が道場に集まった。

質問に答えなければ帰れないと感じたレオンは目を瞑り、静かに言葉を紡いだ。

「母は私が殺しました」

『えっ！？』

突然のカミングアウトに全員が驚くがレオンは先を謂う。

「母は私を産めば死ぬと解っていながら私を産み、そして宣告通り、死にました。ですから私は文字通り母の全てを奪い、生を受けました」

『……………』

一気に場が重たくなったが、レオンは構わず続きを話した。

「母に関する記憶媒体は一つもありませんでしたので、私は母の顔すら知りません。唯一解っている事は、父の言葉で母が強い女性であったということだけです」

そこで一旦レオンは言葉を切った。目を開けてみると四人は物凄く気まずそうな雰囲気であった。桃子に至っては目元に涙を溜めていた。

レオンは再び言葉を紡ぐ。

「父も既に他界しています。父は自分の持つ全てを私に叩き込み、

一人前と認めた数カ月後に死去しました」

父が死んだのは自分が15歳の時だ。フラガの当主と認められた後、父は一気に老け込み、そして死んだ。

既に十年近く前の話だが、そう言っても信じないだろうからレオンは言わなかった。

「それ以降、私は一人で生きていました。……私の両親については以上です。本日は夕食にお招きいただき、ありがとうございました」

そこまで話したレオンは立ち上がり帰ろうとしたが、士郎がそれを止めた。

「ちょっと待ってくれ。失礼だけど、君には頼るべき人はいるのかい？」

「いえ、いません。私は一人で生きています」

「じゃあ今は一人で家に住んでいるのか？」

「ええ、廃ビ……ゲホン、ゲホン……心配は無用です。私は今まで一人で生きていましたから」

レオンは本心からそう言ったが、見た目は子供である。

士郎は何かを考える仕草をした。そして次に士郎が言った提案はレオンにとって意外なものだった。

「レオン君。もし良かったら、俺の養子にならないか？」

「はっ？……冗談……ですよね？」

「俺は本気だよ」

レオンは驚いた顔で士郎以外の三人を見るが、他の三人は賛成なのか頷いていた。

その事にレオンは面喰らった。だが、正氣に戻ると考える素振りさえ見せずに即答した。

「お断りします」

特に今の環境に不満は無いし、魔術師である自分が魔術を欠片も知らない一般家庭に溶け込むことは不可能と考えレオンは断った。

「そうか……残念だよ……」

士郎もレオンの何かを感じ取ったのか、それ以上養子の事は言わなかった。

「だけど君はまだ子供だ。もし困った事があつたら気軽に相談してくれ」

「分かりました」

こうしてレオンは高町家に対して少なからず縁を持つようになった。

あれから数年が経過した。

その間特筆すべき事件は何も起こらず、自身の体の成長を待ち、同時に適度に体を鍛えていた。

高町家とは、自分の事を深く詮索しない事も手伝い、良好である。1年前から高町家の道場を使うようになり、最近では最低週一度は早朝道場にて恭也さん相手に模擬戦をしている程に。

模擬戦の相手としては土郎さんの方が強いが、今の自分では手加減が苦手なことも相まって確実に殺人技を放ってしまうのが目に見えており、流石にそれはマズイので何とか理由を付けて土郎さんとの模擬戦は避けていた。

模擬戦時はプロテクターを装着して模擬刀と打ち合っている。そして互いに手加減しているので大体引き分けて終わる。だがなのはが見学に来ると恭也さんは本気になる。……妹魂^{シスコン}め。

こちらにも本気を出せば十分に応戦できるが、それは魔術の使用を意味しているので嫌々ながら負けを選んでいる。その後は毎回土郎さん直々に恭也さんは折檻され、その様子を見て溜飲が下がる。

模擬戦が終わるとそのまま朝食を高町家で頂き、そして翠屋で働くのが一連の流れだ。

仕事に関しては難しいことは不可能だが、注文の聞き取りや、料理の運搬、その他の力仕事なら問題なくこなせた。

その仕事ぶりに土郎さんは給料（小遣い）を渡そうとしたが、それは断った。代わりに土郎さんの交友の広さを見込んでルーン石の調達をお願いした。土郎さんは最初こそ頭に疑問符を浮かべていたが、今では快く引き受けてくれる。因みに代金はキチンと払おうとしたが、丁重に断られた。代わりに諦めていないのか、毎回養子にならないかと言ってくるので全て断っている。

肝心のルーン石だが、当然ながら当たりハズレが激しい。一級の物も在れば、全く使えない屑も在る。使える物には魔力を込めて保管している。

拠点としている廃ビルは工房代わりに地下室を自分で掘り、魔術関係の物はそこに置いている。あとドラム缶や釣竿などの小物が追加された。

なのはに関してはあの時以来慕われており、簡単な遊び程度なら付き合っていた。

だが一時は魔術を教えろとしつこく、その余りの鬱陶しさに無視を決め込んでいた時もあった。するとなのはが泣き出して、それを聞き付けた代行者と準代行者クラスの實力を持つ二人に小太刀を構えられたまま町中や森を永遠と追いかけられた。

……正直、あれは死ぬかと思った。

その教訓もあり、なのはには今も定期的に構っている。

穏やかで平和な日々が続く。時計塔時代の出来事が遠い日の出来

事に感じる程に。

平行世界へ移動し、子供の身体となったこの現象は第二の人生を送っているのと同意だ。

だからこそ、銘刀が蔵の中でひっそりと錆びるように実戦に於ける魔術の運用を止め、机に向かい研究に励む魔術師としての生き方を選んで良いかもしれない。

そう思っていたその年、事件は起きた。

プロローグ2（後書き）

プロローグはこれで終わりです。

FATE世界からリリカル世界に移動するのに宝石翁を出しました。つと云うか、宝石翁の力を借りなければ無理です。

最初、オリ主を最強と書きましたが、飽くまで執行者内での最強であり、時計塔最強ではありません。オリ主の強さは時計塔内では中の上から上の下です。それから上は真正正銘の化け物ばかりです。廃ビルの際はダメット分が足んねえ！つと半分勢いで書きました。後悔はしていません。

次話はオリ主の簡単な設定を書きます。

最後に。駄文かもしれませんが、閲覧される皆様が少しでも楽しめるような小説を投稿したいと思っています。

誤字の指摘やアドバイス等がありましたらお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4901z/>

魔法少女リリカルなのは ～逆光剣を継ぎし者～

2011年12月16日20時53分発行